

東松島市の象徴を活かしながら 居心地の良い畳での暮らしを



圧着加工で作製された置き畳は、畳縁に縫い糸が出ない。ブルーインパルスが敷かれた部屋はファンにはたまらない場所だ

事業 概要

平成29年度
補正

薄くて丸めることが可能な、 新感覚で利用できる畳の商品化

これまでの縫合加工ではない圧着加工を取り入れることにより、薄く柔らかい畳床への接着が可能になり、縫い糸が表に出ない置き畳やヨガマットなど新製品の加工が可能になったほか、お客様のご要望に応じて柔らかい畳も提供出来るようになった。

東松島市を象徴するものを オリジナル商品に

「震災の時、ブルーインパルスは福岡に展開していて難を逃れました。2年後にここを飛んだ時、やっと日常が戻ってきたと感じて、すごく嬉しかったんですよ」いつも店の上空を飛んで見慣れた機体も、その帰還は代表の清水好和さんにとっても特別だった。昭和14年に祖父が創業した畳店では、地元の一般家庭の畳を取り扱ってきた。震災直後は津波被害にあった住宅のリフォーム、災害公営住宅への納品と多忙だったが、それがひと段落した後、この店ならではの商品をと考え2016年に生まれたのが、ブルーインパルス畳だ。



一級畳製作技能士の資格と優れた技術。丁寧に畳を仕上げていく

縫合加工から圧着加工へ これまでなかった発想を導入

「私がデザインして畳縁を作りました。その畳をブルーインパルスファンのSNSに投稿したら、もの凄く好評を得たんです。さらに松島基地の官舎の畳替えでも使って貰い、全国から転勤してくる方々がまたSNSで拡散してくれたんです」。現代の家屋は和室が少ないので、置き畳として販売しようと考えたが、従来の畳は糸で縫うため、縫い糸が畳縁のある側面に出てしまう。そこで業界の発想を覆し、圧着加工が出来る機械を導入した。粉末接着剤を採用し、加圧時間や温度は実験を続け、最適なものにとどり着いた。置き畳の商品化を実現しただけでなく、既存の機械では縫えない柔らかい畳床にも対応出来るようになった。「昔に比べて畳が硬くなった」と話すお客様にも、気に入っていただける畳が作れるようになった。



従来の畳製作の手法を覆す小型熱圧着機



畳縁を活かしたグッズ
手前のカメラストラップが一番人気



青空を飛ぶブルーインパルスは
夢と希望の象徴

ブルーインパルスを活かした街づくりで コロナ後の未来を描く

2020年は新型コロナウイルスの影響で、松島基地航空祭も中止になった。畳縁を利用したブルーインパルスのグッズを扱う清水畳店には、毎年大勢のファンが立ち寄っていたが、航空祭がなくなったことをきっかけに通販サイトを立ち上げた。また東松島市商工会が開催した「東松島経営大賞」で、宿泊業とコラボしたブルーインパルスを活かした誘客方法をプレゼンし、大賞を受賞した。ブルーインパルスを観光資源として活用しながら街全体を盛り上げ、次は宮城県を象徴するものを使った畳を販売したいと考えている。



清水畳店
代表 清水 好和 氏

会社の強みは何ですか？



自社で採寸・製造を行うので、お客様の要望や部屋の構造、ご希望に合わせた畳を製造することが出来ます。また洋室にも合うカラーデザイン畳、そして当社オリジナルのブルーインパルス柄の畳縁を活用して他社との差別化を図っています。

ブルーインパルスの良さは何でしょうか？



みんな大きく口を開けて笑顔で見ているんです。SNSでファンの方が「世界の飛行機すべてがブルーインパルスだったら戦争はなくなる」と書いていました。私たちに日常、そして夢と希望を与えてくれる飛行機だと思いますね。